

特集にあたって

鈴木 敦夫 (南山大学)

施設の最適配置に関する問題は、OR の分野で最も古くから研究されているものの一つである。最適配置問題は昔は主として数学的、幾何学的な関心から興味を持たれていたが、Hakimi 教授が 1964 年に Operations Research 誌にネットワーク上の最適配置問題の論文を発表して以来、OR の雑誌に理論的、実用的な成果が続々と発表された。

日本でも最適配置問題についての研究は盛んで、特に昨年まで、「都市の OR」研究部会が筑波大学の腰塚先生を中心に活発な活動をされていたことは会員の皆さんのご存知のとおりである。海外では、アメリカ合衆国は、INFORMS (Institute for Operations Research and Management Science) の SOLA (Section of Location Analysis)、ヨーロッパでは EURO (The Association of European Operational Research Societies) の EWGLA (EURO Working Group on Location Analysis) が活発な研究活動を続けている。また、この 2 つが 3 年に 1 度、ISOLDE (International Symposium on Location Decision) というシンポジウムを開催している。このシンポジウムはヨーロッパとアメリカで交互に開催されており、昨年はポルトガルで第 8 回が、2002 年にはカナダで第 9 回が開かれる。

さて、このように最適配置問題に関する研究活動は活発で、論文も多く発表されているのであるが、一方、実際に施設を配置する業務にたずさわっている実務家からは、いざ配置を考えると、これらの研究は役に立たないという批判も多い。確かに、最適配置の理論の研究者がもう少し実務家に親切であれば、と思うときもある。が同時に、実務にたずさわる方も、最適配置の理論をもう少し使ってくればということもある。お互いの交流が進めば、最適配置の理論の実際問題への応用の可能性は大いに広がるのではないだろうか。

このような状況で、今回の特集について編集委員会からは、最適配置問題に関してなるべく幅広い話題と

執筆者を、というリクエストをいただいた。筆者は、上で述べた可能性がこの特集で少しでも実現に近づくよう、理論と実務の両方の読者に興味を持ってもらうこと、話題が偏らないこと、国外の研究も紹介できれば、などと考えて特集を編ませていただいた。結果として、話題は、最適配置のモデルの適用例 (大澤先生)、最適配置モデルの解法に関するもの (Daskin 教授)、ハブ空港の最適配置モデルの紹介 (佐々木美裕先生)、商業施設の小売吸引力の推測 (Drezner 教授夫妻)、ファミリーレストランの配置 (姜先生) のようになった。いずれもそれぞれ興味深い論文である。

これらの論文の執筆者は、いずれも筆者がお付き合いいただいている方々である。その意味では「幅広く」はないかもしれない。大澤先生、Daskin 教授の論文の翻訳をお願いした鈴木勉先生とは OR 学会で 15 年以上も前からずっとお付き合いいただいている。「都市の OR」研究部会でも色々と教えていただいた。Daskin 教授、Drezner 教授夫妻とはカリフォルニアで開催された第 5 回の ISOLDE 以来の知り合いである。特に Drezner 教授夫妻には、研究上も、筆者のカリフォルニア滞在中もお世話になっている。佐々木先生と姜先生は南山大学の同僚である。姜先生には、ファミリーレストランの配置問題をコンサルティングされているという話をうかがって、是非執筆をとお願いした。また、これを機に OR 学会の会員にもなっていただいた。

これらの執筆陣に共通するのは、それぞれの分野で優れた研究をされている研究者ということであろうか。会員の皆様には、是非、この特集の記事を熟読され、研究、実務にお役立ていただきたいというのが、筆者の願いである。最後に、快く原稿の執筆、翻訳を引き受けてくださった執筆者、翻訳者の方々、この特集についてアドバイスをいただいた編集委員会の皆様、原稿集めから種々の連絡までお世話になった事務局の方々に感謝の意を表したい。